

＜株式会社エフエム東京 第468回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和2年5月度

※新型コロナウイルス感染防止のため、ご参集頂かず、素材の郵送またはメール送付・レポート提出対応といたしました。

3. 委員の出席：委員総数6名（社外6名 社内0名）

◇レポート提出委員（5名）

ロバート キャンベル 委員長	内 館 牧 子 委員
秋 元 康 委員	
佐々木 俊尚 委員	松 田 紀 子 委員

◇レポート未提出委員（1名）

川 上 未 映 子 委員

◇社側確認者（レポート確認者）（8名）

黒 坂 代表取締役社長
西 川 取締役副社長
小 川 常務取締役
内 藤 執行役員編成制作局長
延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長
若 杉 編成制作局制作部長
松任谷 編成制作局制作部チーフプロデューサー

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

2. 番組試聴

【番組名】『TOKYO SPEAKEASY』 月曜～木曜25:00～26:00

【放送日時】4月6日（火）25:00～26:00 放送のダイジェスト 約20分

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

※新型コロナウイルス拡散防止のため集合せず、
番組視聴のみで活動報告はなし

2. 番組試聴

【番組名】『TOKYO SPEAKEASY』 月曜～木曜 25:00～26:00

【放送日時】4月6日（火）25:00～26:00 放送のダイジェスト 約20分

【番組概要】

今回ご視聴いただくのは、2020年春の改編で4月6日(月)にスタートした『TOKYO SPEAKEASY(トーキョー スピークイージー)』の初回放送のダイジェストです。この番組は、毎晩日替わりで、2人の出演者が深夜にスタジオに集い、台本なしの生放送で“ガチ生トーク”対談をお届けしています。

(※現在は、新型コロナウイルスの影響を鑑み、リモート形式をとる回もございます)

タイトルは、禁酒法の時代のアメリカで、こっそりひそかに営業していたバーの文化「SPEAKEASY (スピークイージー)」をイメージし、2020年の東京で、とある小さな本屋の奥の部屋に存在する架空のバー、『TOKYO SPEAKEASY』を舞台とした設定で、ナレーションは國村隼氏がつとめています。

番組の企画・監修は秋元康氏。番組について、「本当はパーソナリティを決めるのがいいのかもしれませんが、影響力のあるユニークな掛け合わせの2人がその時間、そこにやって来て、何のテーマも決めず話していくというのがおもしろいのではないかと。誰と誰に会ってもらうか、それも日替わりで、そうするとその中で、その日にしかできない話題、その日に一番ビビッドな話題、あるいは何か社会的な事件があればそのことについて、今何に興味を持っているか、トークが繰り広げられていくと思います。また、ビジネスなのか文化なのか、何かここを通じて生まれるような場所にしていきたい。」とコメントしています。

お聴きいただく初回、4月6日(月)の放送では、リリー・フランキー氏と野田洋次郎氏(RAD WIMPS)が出演。気心知れた間柄である2人の居酒屋トークのようなここだけの会話や、野田洋次郎氏による生演奏が、初回から大きな話題となりました。



◀放送当日の様子

これまでに出演した対談ゲストと今後の対談ゲスト ※一部情報解禁前

4月7日	見城徹×林真理子	5月4日	田中みな実×小宮山雄飛
4月8日	堀江貴文×落合陽一	5月5日	マキタスポーツ×宮沢章夫
4月9日	古舘伊知郎×周防正行	5月6日	亀田誠治×山本彩
4月13日	松田誠×佐藤流司	5月7日	菅本裕子×伊織もえ
4月14日	佐藤二郎×垣内俊哉	5月11日	井筒和幸×外波山文明
4月15日	吉田豪×木下百花	5月12日	大宮エリー×小嶋陽菜
4月16日	野呂佳代×関根勤	5月13日	茂木健一郎×ナイツ塙宣之
4月20日	指原莉乃×若槻千夏	5月14日	宇賀なつみ×海原純子
4月21日	大橋裕之×今泉力哉	5月18日	中井美穂×鈴木保奈美
4月22日	木村祐一×田口トモロヲ	5月19日	渡辺淳之介×柏木由紀
4月23日	古市憲寿×小倉智昭	5月20日	東野幸治×結
4月27日	中井りか×小籟千豊	5月21日	鈴木京香×星野哲也
4月28日	久本雅美×上地雄輔		
4月29日	近田春夫×適菜収		
4月30日	箕輪厚介×西野亮廣		

【委員の意見】

○仲良しの2名がその日だけの「流しトーク」をためらいなく展開する、というのは生っぽさがあってとても興味を惹かれた。がちがちに構成された番組より、ゲスト同志の仲の良さがにじみ出るその感覚に、心惹かれる。日替わりでいろんな方が登場するのも楽しみのひとつだと思う。

ただ、日替わりだけにゲスト告知が行き届かないと聞き逃す率も高く、日替わりだけに「番組ファン」をどう醸成していくか、が考えどころ。（ファンは普段、パーソナリティに付くと思うので）

○リリーさんと野田洋次郎さんの声がどちらも良い。二人がそんなに仲が良いとは知らなかったが、ゆったりとしたトークに、心がほっこりした。禁酒法時代の裏酒場という舞台設定も國村さんの渋い声で語られると、イメージできる。作られた「その人」よりも、生っぽい素の「その人」のほうがグッと魅力が増すので、この番組はゲスト同士がそれを引き出す形になっていて、一般的な番組にありがちな「お約束」がない、という点が魅力だと感じる。他のゲストの回も、radiko で聞いてみたい。

○タレントや歌手、作家などの著名人の様子を正面玄関ではなく裏口から、彼らの交流やナマの発言をうかがい知るという構成は、ラジオによく適合したスタイル。こういうかたちのものは1980年代～90年代によく見かけたので、何だか懐かしい感じがする。その時代に青春を送ったいまのバブル世代から団塊世代ぐらいには良くターゲティングされた番組構成で、その層にはとても楽しめると思う。リリー・フランキーさんや林真理子さん、見城徹さんあたりが出演するというのはまさにその狙いなのだろう。ただ2010年代以降は、SNSの登場と普及によって「セレブ対一般人」という構図そのものが変化してきている面もある。「セレブの秘められた生活を一般人がかいま見る」というのは、セレブの生活実態が見えないネット以前の時代だからこそ成立したコンテンツだったと思うが、いまのセレブはその肉声や生活も含め外側にもっと開けてオープンになっており、一般人との関係性もよりフラットになってきていると感じる。もし若年層の掘り起こしも期待するのであれば、そういうSNS時代の新しい「セレブの秘められた内面」みたいなものが浮かび上がってくるような番組も期待したい。

○ちょっとセクシーで濃い演出が時間帯にもよく、初回の2人にぴったりだと感じた。夜の男同士のバー話という陳腐な設定に陥ることなく、お互い軽妙に

飲み屋で撮られた話とか、洋次郎さんが流しで梯子したエピソード、コロナのことを上手く途中で少しだけねじ込ませるといふ運びにも好感を持った。洋次郎さんの歌「光と影」はとても美しかった。

○リリーさんが事実上のMCみたいな格好で回しているのは悪くはないが、ゲストの間柄やバランスは工夫が必要だろう。しかし一回聞くというよりも夜な夜な現れる人たちの話ぶりに隣の席から聞く耳を立てて聞くという定点的な快楽がこの番組の旨みになってくるのではという予測は立った。喫茶店で立ち聞きした話。多和田葉子「百年の散歩」冒頭に書かれたシーンを思い出した。

○まさにラジオならではの番組だと思った。2人が全く肩に力を入れず、行きつけのバーで久々に会っている感じがよく出ていた。リリー・フランキーさんはドラマや映画やCMの時より活舌が悪く、それが逆に仕事っぽくなく、いい雰囲気を出していた。生演奏も、店に立てかけてあったギターをひょいと手にして歌っている感じ。かつて70年代にはこういう風景がよくあった。70年代を知らない若い人たちにとても贅沢なプレゼントになったと思う。

○驚きを通り超えて、もはや呆れまで感じてしまうのは毎回のゲスト。よくこの時間帯の生放送に日替わりでこんな名だたるゲストが出演するものだ。企画監修の秋元氏の手もあると思うが、普通これほどのゲストは呼べないのでは。

○この番組はゲストのフリートークの力、あるいは頭の良しあしが出かねず、怖い。しかしその分、リスナーには刺激があるだろう。今後、サービス精神のないゲストや、偽善者ぶったゲストなど出演してもおもしろいと思う。

○ずっと、最近のラジオは“構成し過ぎ”だと感じていた。ここでこういう話をして、ここで曲を掛けて……。キレイにまとまり過ぎているんじゃないか？と。以前のラジオは、いい意味で“いい加減”“テキトー”だったように思う。喋り手も作り手も、“やってみながら考えよう”としていたので、予定調和を壊せたのだと思う。なので、そういう“台本のない”“構成もない”トークの場所だけ提供するような番組を企画した。ゲストの2人が、好きなことを勝手に話すだけの番組。テーマは何でも構わないし、テーマなんかなくてもいい。音楽をかけてもいいし、掛けなくてもいい。今日のゲストの2人がどんなことを話すのか？それを盗み聴きするというのがコンセプト。普段から仲がいい2人の場合もあるし、今回、初めて会う2人もいる。どんな話が飛び出すかわからないのが、この番組の面白さだと思う。番組の設定として、1920年

代の禁酒法時代のもぐり酒場“SPEAKEASY”を舞台としているが、この設定すらなくてもいいかもしれない。深夜にトークの場を提供したかっただけなので。無理に深夜のバーという設定にしたせいで、かつて放送していた番組『AVANTI』と似ていると言われてしまったのは、残念。リスナーのニーズに応えようとして、予定調和になってしまう番組が多い中で、リスナーのニーズは全く関係なく、話したい人が話したいことを話す番組は、実験的ではあるが、今後、どう反応するか楽しみだ。